

神話の中の神々とは？！

『記紀』、“古史古伝”の旅に出かけてきました！^^

兼六園の一角に、金沢の地名の由来となったとされる“金城靈澤”があり、

すぐ傍に、寄り添うように“鳳凰山”があります。

そこから飛び立った“鳳凰”が、全てを見渡しているのが、“金澤神社”であるような気がします。^^



鳳凰山(左奥)と、金城靈澤(右手前)



御祭神は、菅原道真公(学問の神・前田家の先祖)、白蛇竜神(金運・災難除の神)、

白阿紫稻荷大明神(商売繁盛の神)、琴平大神(交通安全)

前田齊広公(12代藩主、初代は利家公)、前田齊泰公(13代藩主)とされます。

“学問の神”と言われる“菅原道真公”は、新G(WBH)マスターの一人なのでは？と。^^

“白蛇竜神”、“白阿紫稻荷大明神”の“白”からも、GWBH=神聖“白”色同朋団がイメージされます。

また、“キリスト”(12次元キリスト庁)や、“マリア”(13次元聖母庁)のエネルギーも感じられ、

ここは、宇宙の様々な高次(天界)とつながる、壮大な座標(ポータル)であり、

その中心にある=“核”となっているのが、“日本神界”だと思います。

自身にとっては、“どニでもドア?!”(笑)のような…、ワクワクのテーマパークのような場所です。^^



金城靈澤周辺は、いつ来てもちょっと浮世離れた雰囲気です。
澄み渡る空気と、眩しい光の世界、“シャンバラ”へとつながるゲートなのかもしれません？^^
シャンバラは、新Gの創始とされる“サナートクマラ”が、地底に築いた光の都市であり、
地球神“国常立大神”が住む、日本神界の中心と言われます。
シャンバラから地上へと流れ出る、豊かな水を守るかのように、金城靈澤の天井裏で、
ヒツソリとたたずむ“黄龍”は、
今という時をじっと待っていた、日本の“黄金龍神”=“国常立太神”ではないでしょうか！^^



これまでは、少し淋し気に見えていました…。

こちらは金澤神社webからお借りした、神社本殿の天井裏に描かれている“白蛇龍神”と
その下で舞う“蘭陵王”の、美しい！ツーショット写真です。^^



舞楽 蘭陵王

ここに、赤と白、明・暗、陰・陽——、二極のあらゆる全てがある感じ。。。一瞬で心奪われました。

そして、白蛇龍神さんの顔があまりにも怖すぎる…、で浮かんだ言葉が、“**良の金神**”?!
忌み嫌う存在として良の方角に押し込められた、その真の姿は、“**国常立大神**”と言われます。

金城靈澤の天井裏に住む“**黄龍さん**”の、もう一つの顔が“**良の金神**”であり、
中今、根源の光に眩しく輝く、“**黄金龍体**”=“**国常立太神**”=“**新地球神**”! だと思います。^^

国常立太神を良に押し込めていたのは、他の誰でもない、

3次元という小さな殻に、∞の意識(真の自己)を封じ込めていた自分自身であった?!と気付いた時、

日の本の黄金龍神は、鳳凰となって大空(宇宙)へと舞い上がった!!

大きな感動と喜びを感じた地上セルフでしたが、もう一つ、気になっていた事があります。

それは、神社本殿において、菅原道真公の相殿として祀られている“**巳さん**”(白蛇龍神の別名)でした。

ここに来る度に、巳さんが何かを伝えようとしている…気がするのですが、
いざ表現しようとする、さっぱりまとまらないので、「まっ、いっか〜!」となるのです。(笑)

今一度、チャレンジしてみたいと思います! ^^

<巳さん(白蛇龍神)のはなし> (金澤神社 Web より)

当社は天神さん(学問の神)として多くの方に崇敬されていますが、相殿としてまつられている
白蛇龍神(通称白蛇さん・巳さん)も、火難・水難・災難除け・金運・商売繁盛の神として
多くの方々に崇敬されています。

御神体勧請由来記によれば、**雄雌二体の白火蛇**であるということです。

中国の文献によると、白火蛇とは中国大陸の奥地に千年に一度現れるという蛇で、
「吉凶を人間に知らせるもの」とあります。つまり五穀豊穡や天災を知らせたといわれています。
そして、**この蛇が、中国から出雲の日御碕に伝えられ、それがここに祀られた**とされています。

巳さんは、中国から出雲へと伝わり、そして金澤神社へとやってきた“**雌雄二対の蛇**”?!

とあることから、古代中国神話における“**三皇五帝**”(三皇は神、五帝は聖人としての性格を持つ君主)の三皇とされる、

“**伏羲**”(ふくぎ、ふつき)と“**女媧**”(じょか)につながりました。^^

「伏羲は、兄妹または夫婦と目される女媧と共に、蛇身人首の姿で描かれることがある。」

「伏羲は、黄帝・神農などのように、古代世界において、さまざまな文化をはじめてつくった存在として語られる。」

「大洪水が起きたときに、二人だけが生き延び、それが人類の始祖となったという伝説が、
中国大陸に広く残されている。」(ウィキペディアより)

まさに、人の顔を持つ二対の蛇が絡まりあう、伏羲と女媧の画像が掲載されています。

「大洪水」や「人類の始祖」とある事から、ノアの箱舟で有名な旧約聖書の創世記が連想され、

それは、地球規模で起こった一つの出来事を、それぞれの立ち位置で

表現しているだけなのかもしれない…、と感じました。

太古の昔は、まだ地球上に、国境や人種等の明確な概念は存在していないはずで、後世になって、“神話”という形で、それぞれが、様々に表現し、伝えてきたのかもしれませんが。伏羲は、『富士古文書(宮下文書)』と呼ばれる古史古伝の中に、登場している事がわかりました。^^

神武天皇が現れるはるか以前の超古代、富士山麓に勃興したとされる、「富士高天原王朝」に関する伝承を含み、その中核部分は、中国・秦から渡来した、徐福が筆録したと伝えられている。だが、その信憑性については疑いがもたれており、いわゆる古史古伝の代表例に挙げられる。(ウィキペディアより)

日本が誇る富士山は、ほんと～～に**美しい！** いつ見ても **感動！！**です。^^

そこに一つの王朝があったとしても、何の不思議もないのではないのでしょうか？

自身にとって古史古伝は、中今(過去と未来が同時にある、∞の可能性もつ“今ここ”)を知るヒントとなるものであり、パラレルワールド(並行時空)と呼ばれるものでもあるのでは？と。^^古史古伝に触れると、なんとなくワクワクするのは、魂(真の自己)が求める何か？がそこにあるからで、疑念の雲をはさまず、楽しみながら登ってみたいと思います。(^^)/

『富士古文書(宮下文書)』は、まとまった一つのストーリーではなく、膨大な文書の寄せ集めとされ、天地開闢に関する物語も、二つのパターンが見られるとのこと。

その一つが、先の“伏羲”を始祖とするもので、日本の蓬莱山(富士山)から、大陸(中国)へと渡った伏羲には、“神農”(高皇産霊神)という名前の子供があったとされます。神農には七人の息子がおり、五男の“農立”(国常立尊)と七男の“農佐”(国狭槌尊)が、神農の命によって日本へと渡り、蓬莱山に神都(富士高天原)を築きました。それが、“富士高天原王朝”であり、後を継いだ伊邪那岐尊・伊邪那美尊から天照大御神へ、(“ウガヤフキアエズ王朝”を経て、)神武天皇の“大和王朝”へとつながっていきます。伏羲一族の系譜(家系図)には、中国の皇帝や朝鮮半島の王族、徐福等の名前と共に、日本へと渡ってきた国常立と国狭槌、イサナギとイザナミ、アマテラス、神武天皇らの名前が見られ、朝鮮半島から渡来した太加王＝スサノオとあります。

日本の天皇家のルーツはここにあったのか？！と、一瞬、**ビックリ？！**の私でしたが、よく見ると、「伏羲は日本から大陸へと渡った」とあり、合点がいきました。^^

日本は、海に閉じ込められた小さな島国ではなく、遙か昔、世界中へと旅立ち、広がっていった、海洋民族でもあります。^^

どこをはじまりとするか？によって、歴史はまったく違って見えてくるのではないのでしょうか。
伏羲や女媧からみれば、今の“中国”も“朝鮮”も“日本”も、皆大切な子孫の住む地であり、
家族の一員で、時代も、国も、人種も関係ないのだと思います。
そう思ったら、自身の中にあつた壁のようなものが消えて、清々しさと喜びが溢れてきました。^^

命あるもの全ては、一なる愛の故郷＝“根源の太陽”から生まれた、
その子供達(分身)です。

根源神の分神である神々は、時空を超えた存在であり、
この美しい“地球”と、そこに生きる全ての生命の為にあるのであり、
長い分離の旅を終えて根源へと帰っていく今、場所や時代にこだわる意味があるのでしょうか？

日本は、“日”≡“太陽”の本の国、根源太陽の国
全ての故郷です！！

それは“今ここ”の、自己の中心“ゼロポイント”でもあります。^^

今回、金澤神社に祀られている“巳さん”からのメッセージ？により、
「中国」、「伏羲」等のキーワードが浮上し、
そこから、『富士古文書』（富士王朝）へとつながりましたが、もう一つ、
北陸地方のかつての名称であつたとされる、“越国こしのくに（高志国）”が浮かんできました。^^

*** 越国(高志国)について*** ウィキペディアより

現在の福井県敦賀市から、山形県庄内地方の一部に相当する地域の、
大化の改新以前の、日本古代における呼称である。
のちに令制国への移行に際して分割され、越後国・越中国・能登国・加賀国・越前国となった。

越後は現在の新潟県、越中は富山県、越前は福井県の事で、石川県のみ“越”の文字が無い？

のですが、その理由は、もともと石川県が越前国の一部だったからのようです。

後に、石川県北部が独立し“能登国”となり、更に南部も独立して“加賀国”となったとされ、

独立の理由としては、越前国が広すぎて統治しづらかつた事と、

能登半島は海に突き出ているので海上を利用し、中央政府に従わない東北方面への兵の輸送や、

朝鮮半島との外交の拠点となる事、また加賀地区には米が豊富に採れる豊かな土壌があり、共に独立する条件が備っていた為であるようです。(能登地方は、越中国の一部となっていた時期もあります。)

以前、富山県の皇祖皇大神宮に出かけた時に、見知らぬ男女の方に呼び止められ、お二人には、これから石川の白山比咩神社へ行く予定があった事と、「富山(能登)は“トト”、石川(加賀)は“カカ”で、セットだよ～！^^v」と、満面の笑顔で伝えられ、妙～?!に納得した事を思い出しました。

加賀一の宮“白山比咩神社”の御祭神は、菊理姫と、伊邪那岐・伊邪那美の三柱であり、まさに石川は、トト＝“イザナギ”と、カカ＝“イザナミ”の住む国なのでした！(お二人は、イザナギ・イザナミの分身?!^^)

富士古文書(神皇記)には、国狭槌の息子の伊邪那岐は、国常立の娘である伊邪那美と結婚し、加賀を中心として、多くの民に慕われる善政を行っていたとされます。

石川県能登地方には、防衛や外交といった、男性性の側面＝伊邪那岐の姿が、加賀地方には、米(太陽と水と大地の恵みの結晶)に象徴される、豊かな台所(安心の気に満ちた場所)があり女性性の側面＝伊邪那美の姿が、映し出されているのかもしれません。

自身が住んでいる石川県の歴史が、神話に登場する神々とつながって見えてきた…というか、神々とは、真に、私達の御先祖様でもあったことが、実感されてきました。^^

また、富士古文書には、国常立の娘の伊邪那美は、“白山姫”と呼ばれていた?!とあり、“白山比咩大神”しらやまひめのおおかみの謎が、少しわかった気がしました。^^

“白山比咩大神”とは役職名であり、“菊理姫”の前が“伊邪那美”だったのでは？と。古くからの白山信仰は、伊邪那美神が中心であり、菊理姫は何となく新しい…？と感じていた事、一時期、白山頂上奥宮の祭祀権を持ち、白山神界の頂点にあったとされる、福井県“平泉寺白山神社”の御祭神が、伊邪那美神である事も、そう考えると納得がいきます。^^

自身が、新しいと感じる菊理姫の御働きとは、“菊理”＝「菊の理」と、“菊理”＝「統合」です。

“菊”とは、**根源神界の中心に輝く太陽(究極の愛の源)のエネルギー**そのものであり、**“理”**とは、**根源の太陽(根源天照皇太神)を中心(核)として、全てが動いてゆく！**という**宇宙の理**、**グレート・セントラルサン・システム**と呼ばれる、宇宙(NMC)の運営システムです。

“くくり”とは、その全ての生命の故郷である根源太陽へと、あらゆる全てをくくり直していくこと＝**統合・回帰していくこと**で、私達が今、根源太陽輝くこの地球へと生まれてきた、究極の目的であり、**真の日の本の役割＝“根源(太陽)へのアセンション！！”**でもあります。^^

“白山菊理姫”は、

“菊”＝“根源太陽の分御魂”を持つ、“根源天照神界”(新宇宙の核心)ポータルであり、かつ、

長い沈黙から目覚めた女神の山＝究極の愛と神聖の象徴、霊峰“白山”を

その中心にいただく“白山神界”(旧宇宙の核心)ポータルでもあります。

二つの神界(新・旧宇宙)をくぐる、∞のパワーを秘めた“白山比咩大神”＝“日女大神”であり、

今生、白山の麓に生を受けた地上セルフの、大切なミッション！と感じます。^^

(石川“白山”＝母性、富山“立山”＝父性、そして“富士山”！と、日本“三大霊山”が見えてきた感じです。

“いづのめ”の働き(観自在、中庸)＝木花咲耶姫であり富士山では？^^)

神話には、天地開闢の神として“造化三神”が謳われています。

宇宙の中心であり、宇宙そのものであると言われる“天之御中主大神”と、

ムスビの働きを持つとされる“高皇産靈神”、“神皇産靈神”ですが、

古神道では、この“ムスビ”の働きを父性原理と呼び、それに対する母性原理があることを知りました。

それは、“ククリ”の働きとされ、まさに、“菊理姫神”の事ではないでしょうか！^^

いよいよ、菊理姫が表に現れ、**新しい宇宙へのゲートが開かれた！！！！**

神話には、よく似た名前の、たくさんの神々が登場していて、

自身は、漢字を読むだけでも一苦勞です。(^^;

神々の名前とは、私達が地上で見たり体験したりしている様々な現象の一つ一つに、

いちいち名前を付けたものであり、そんな事をしていたらキリがない…(笑)

という感じですが、それが全てに神が宿るとされる日本であり、神道なのかもしれません。^^

日本の正史とされる『記紀』(古事記と日本書紀)以外にも、古史古伝と呼ばれる多くの書物があり、

神々が繰り広げる世界は、矛盾と謎で一杯ですが、

3次元という既成概念の枠を超えた想像の場＝∞の創造性を持つ場でもあり、

また、ただのおとぎ話ではなく、私達の史実、歴史書でもあります。

過去・現在・未来をつなぐ柱として、大切に引き継いでいかなければならないものなのではないでしょうか？

天地開闢から、日本国初代天皇と言われる“神武天皇”までの、神々(先祖)の歴史について、

『記紀』の大まかな流れを描いてみました。(左側)

記紀

(古事記・日本書紀)

古事記に基づいた天地開闢の神々
(ウィキペディアより)

造化三神
アミノミナカヌシ
タカミムスビ
カミムスビ

別天津神
ウマシアシカビヒコチ
アメノトコタチ

クニノトコタチ
トヨクモノ

ウヒチニ スヒチニ
ツノグヒ イクグヒ
オホトノジ オホトノベ
オモダル アヤカシコネ
イザナキ イザナミ

神世七代

クニナツチ(国狭槌尊)は『日本書紀』に登場する、神世七代のうちの一柱。

イザナギの禊の場面から誕生した“三貴神”

天照大御神(太陽神)
月読命(月神)
須佐之男命(海原神)

『日本書紀』では、月読と須佐之男の間に蛭児(ヒルコ)が生まれている

天孫降臨・日本国初代天皇即位

アマテラス
天照大御神
アメノオシホミミ
天忍穗耳尊
ニニギ
瓊瓊杵尊
ホオリ ヒコホホデミ
火折尊(彦火火出見尊)
ウガヤフキアヘズ
鷓鴣草葺不合尊

御武天皇 (彦火火出見、狭野、神日本磐余彦天皇)
『記紀』における、日本国初代天皇

『日本書紀』では瓊瓊杵尊の前に邇邇速日尊が、天照大神(天神?)から十種の神宝を授かり降臨したという説がある。

富士古文書

①.【天之世】^{アメノヨ} 天之神七代

天之峰火夫神・天之峰火母神
天之高火男神・天之高火女神
天之高地火神・天之高地火女神
天之高木比古神・天之高木美神
天之草男神・天之草美神
天之高原男神・天之高原美神
天之御柱比古神・天之御柱美神

②.【天之御中世】^{アメノミナカヨ} 火高見神十五代 ※()内は謄

アメノミナカヌシ アメノミナカヒメ
天之御中主神・天之御中比女神
タカミムスホ カミムスホミ
高皇産穗男神・神皇産穗美神
ウツホヒコ ツツホヒメ
宇都峰比古之神・宇都峰美之神
ウマシウカヤヒコ ツキミサヒメ
宇摩志宇加彌比古神・津木峰美之神

アメトコタチヒコ アメトコタチヒメ
天之常立比古神(神農比古)・天之常立比女神(彌真加身比女)

アメノミハシラタチ アメノミハシラメ
天之御柱立神(農立比古)・天之御柱女神(農里比女)

七代~十四代略

タカギムスビ カミムスビ
高皇産靈神(天之神農氏神・農作比古)・神皇産靈神(天之神農比女神・農作比日)

③.【高天原之世】^{タカマハラノヨ} 天神七代 (※男神のみ記載)

クニトコタチ
国常立尊(農立比古)
クニサツチ
国狭槌尊(農佐比古)

トヨクモヌ
前記:豊斟尊(阿和路比古)・後記:尾茂太留尊(農田比古)

ウヒチニ
泥土煮尊(日本比古)

オホノヂ
大戸道尊(農実比古)

オモダル
面足尊(穗千田比古)

イザナキ
伊弉諾尊(田仁知比古)・伊弉冉尊

イザナギ・イザナミ二神から誕生した“三貴神”

オオヒルメ(大市姫)→天照大神(平地の主)
月峯命→月讀命(山岳の主)
ヒルコ命→崇日子(海洋の主)

スサノオ(太加王)は、高皇産靈神の子孫(曾孫?)となっている。

④.【豊阿始原之世】^{トヨアシハラノヨ} 地神五代

オオヒルメ
大日留女尊(天照大神)
アメノオシホミミ
天之忍穗耳尊(豊武比古)
アマツヒコホノニギ
天日子火仁人木尊(武雄比古)
ヒコホホデミ
日子火火出見尊(火遠理命)
ヒコナギサタケウガヤフキアヘズ
日子波瀲武茅葺不合尊(阿祖男命)

⑤.【宇家澗不二合須世】^{ウガヤフジアハスノヨ} 五十一代(七十五代)

ヒコナギサタケウガヤフキアヘズ
日子波瀲武言合命(豊阿始原之世五代)

チホタカミコ
千穗高王命
(三代~五十代略)

ヤマトラミコ タマテリヒメ イツセミコ
弥真都男王命・玉照比女命・五瀬王命(皇太子 戦死)

ナギサタケカムヤマトイハルヒコホホデミノスメラミコ
波限建神日本磐余彦火火出見天皇(御武天皇)

右側には、『富士古文書』に出てくる神々を、時代ごとに並べてみました。

『記紀』と『富士古文書』は、全く別のものなのでは?!との思い込みがあったのですが、

並べてみると、『富士古文書』は、『記紀』の詳細版という感じでもあります。^^

『記紀』に登場する神々、特にイザナギ・イザナミ以前の神々は抽象的(役職名、本源?)であり

人とはかけ離れた、夢物語の中の存在…という感じですが、

『富士古文書』は、存在した時期や場所が具体的に記されていて、よりリアルです。

神々の名前の多くは“役職名”であり、同じ役職名を持つ、多くの神々(個性)が存在すると言われます。

もしかしたら、『記紀』は役職名を並べたものであり、数多くの時空(座標、可能性)を内包していて、

『富士古文書』の神々は、その中の、ある特定の時空にフォーカスしたもの

例えば、同じ“アメノミナカヌシ”(宇宙神)でも、独自の個性をもつ“アメノミナカヌシ”なのかもしれません。^^

どの“アメノミナカヌシ”から始まっていくかで、そこから広がっていく世界と、そこに登場する神々も、

違うものとなっていくのではないのでしょうか(パラレルワールド?)。

そういった様々なパターンを描いているのが、神話や古史古伝と言われるもので、その物語に触れて、

それを真実と感じるのなら、自身もその世界の一人である、という事なのかもしれません。^^

富士古文書では、“アメノコタチ”から“神農”という諡が付いているので、“農”銀河?のはじまりを表しているのかも…

3Dの頭で、深く考えれば考えるほどわからなくなるので、この辺で…(笑)

金澤神社の巳さんから、『富士古文書』と出会い、より大きな世界が見えてきた感じです。

“富士王朝”は存在したと思います!(その先には、“白山王朝”が見えて来た?^^)

富士は“不二”(たった一つのもの)＝“ワンネスとなった地球の象徴”であり、高次元宇宙の窓口となる座標!

富士高天原王朝を築いた“クニトコタチ”の娘が“イザナミ”であり、“白山姫”と呼ばれていた事や、

イザナギ・イザナミの二神が、加賀を拠点として活躍していたとされる事等から、

自身の“中今”＝ハム(白)山につながっている神々の姿がより鮮明に見えてきて、パワーアップしました!

『記紀』では、アメノミナカヌシより前の神々については触れられていませんが、

『古事記』の元となったとされる『帝皇日嗣』には、その名前が記されている事がわかりました。

第73世武内宿禰 竹内睦泰氏によると、『帝皇日嗣』とは、

代々正統竹内家に伝わる口伝『正統竹内文書』そのものであるとされます。

先にもふれましたが、2018年に富山県の皇祖皇大神宮を訪れた時に、

もう一カ所気になって訪れていた神社があり、

それは、二上山を御神体とする“二上射水神社”で、二上山には武内宿禰の墓があり、

正統竹内家が祭祀拠点としていた山であることを、後に知りました。

地上セルフはその日何も知らずに、両方の竹内家を訪れていたこととなります。^^

自身が二上射水神社を訪れて最初に感じたのは、“光輝く太陽神”の姿で、

注連縄に目がとまり、“天の岩戸開き神話”が浮かびました。

御祭神は“二上大神”とされ、どのような神様なのか？全く想像できていなかったのですが

二上とは、二神 = “二柱の神”でもあり、“スサノオ”(男性性)と、

天の岩戸に隠されていた“アマテラス”(女性性)なのでは？と感じました。

二上射水神社には築山行事と呼ばれる、菊理姫が登場する特殊神事が継承されていて、
菊理姫が二上(二神)の間に入り、くくり統合する“根源の岩戸開き？！”がイメージされました。^^

そのような御縁もあつてか？『帝皇日嗣』=『正統竹内文書』に興味を覚え、触れることで、

『古事記』(神々)の世界が、大きく、大きく広がっていきました！^^

『正統竹内文書』と『竹内文書』、二つの竹内家は“陰と陽”、どちらも尊いのだと思います。

神意(深意)の上に存在しているのではないのでしょうか？

『帝皇日嗣』の神々=『古事記』の神々 について、

自身の中に、“神柱”を立てる！イメージで、始まりから順に追っていきたいと思います。^^

帝皇日嗣 “零代” “皇祖元主元無極主大御神” ミオヤモトスミクライヌシ “無の神”。

無の神とは、何もないという意味ではなく、「無という状態がある(空)」とされ、

“根源”、“ゼロポイント”、“∞”とイコールであると感じます。^^

年歴無数とされる長い長い年月の間に、意識の神、音の神、温度の神、重力の神、

光の神、時間の神等(神皇七代)が誕生しました。

【別天津神】ことあまつかみ

《造化三神》

帝皇日嗣 初代 “天之御中主大神” アメノミナカヌシノカミ

宇宙神。宇宙の中心であり、宇宙そのもの。宇宙の運行を司る神。

帝皇日嗣 二代 “高御産巢日神” タカミスヒノカミ

宇宙の生成を司る神。

帝皇日嗣 三代 “神御産巢日神” カミスヒノカミ 約 200 億年前

(現代科学では 137 億年前のビッグバンの頃)

神々を生む神。

以降、動力の神、物質の神等、多くの神々が誕生していきました。

そ まろかれたるものすで こ いきかたちあらわ わざ たれ そ
夫れ 混 元 既に凝りて、氣象効れず、名も無く為もなく、誰か其の形を知らむ。

しか あめつち みはしらのかみあめ はじめ な めをここに ひら ふたはしらのかみよろづ おや な
然れども、乾坤初めて参神造化の首と作り、陰陽斯に開けて、二靈羣品の祖と為れり。

遠い昔のこと、造化の気が次第に凝り固まっても、いまだに外に現れてくるにはいたらず、したがって名前もなければ、動きもない、誰もその形を知らないというそもその宇宙の初めに、天と地とが分かれ、アメノミナカヌシノ神、タカミスビノ神、カミスビノ神の三柱の神が、宇宙造化のいとぐちを作り、陰と陽とが別になって、ここにイザナギノ神・イザナミノ神が、生きとし生けるものの親となりました。

上記は、古事記の原文(と注釈)を、そのまま引用させていただきました。

天地のはじまり(アメノミナカヌシとそれ以前の神々)から、神世七代の終わり(イザナギ・イザナミ)までが、簡潔に(最小限の言葉で)、美しく表現されていて、日本(人)ってやっぱり素敵！

(様々な意味で^^) と思います。

膨大な叡知がぎゅっ~と凝縮されていて、エネルギーによって一瞬の内に伝えるのが、

日本の“言霊”の持つ力なのではないでしょうか？

帝皇日嗣四代 “**宇摩志阿斯訶備比古遲神**” ウマシアシカビヒコチノカミ

葦が芽を吹くように萌え伸びるものによって成った神。独神ひとりがみ、すぐに身を隠した。

帝皇日嗣五代 “**天之常立神**” アメトコタチノカミ 約 100 億年前

天の永久性を象徴する神。(アメノミナカヌシ=宇宙神に対する銀河神。クニトコタチ=地球神。)

独神、すぐに身を隠した。

《古事記には登場しない神 (マル秘)》

“**天御柱神**” アマノミハシラノカミ…天常立神の一部。(天神初代)

“**天八下神**” アマノヤクダリノカミ…(たくさんの)大宇宙の誕生。(天神二代)

“**天三下神**” アマノミクダリノカミ…小宇宙、銀河の誕生。(天神三代)

“**天合神**” アマノアワセノカミ…宇宙の合体と消滅。(天神四代)

“**天八百日神**” アマノヤオヒノカミ…太陽系に相当する宇宙の誕生。(天神五代)

“**天八十万魂神**” アマノヤソロズノミタマノカミ…意識体(魂)の誕生。(天神六代) 約 50 億年前

“**天八百万魂神**” アマノヤオヨロズノミタマノカミ…意識体の育成。(意識体=宇宙の星々でもある。)(天神七代)

“**高魂神**” タカミスビノカミ…高皇産霊神。“高御産巢日神”を地に降ろすことの出来る魂。

？“**神魂神**” タカミスビノカミ…神皇産霊神。“神御産巢日神”を地に降ろすことの出来る魂。

マル秘？ まさにここには、宇宙創生と人類創造の秘密が描かれている感じがします。^^

ここまでの間に、無(根源)からはじまった宇宙に、∞の意識体が誕生し、
育成されていく過程が記されています。

意識体とは、人の本質“魂”の事であり、夜空(宇宙)に見る星々の事でもあって、
私達は無の神(根源)から生まれた、一つの生命の現れであり、宇宙を構成する一要員です。

神話は“神”の名を借りて表した“宇宙の科学”であり、
スピリチュアルと科学が融合された、最高芸術とも言えるのではないのでしょうか？^^

【神世七代】かみよななよ

帝皇日嗣六代 “**国常立神**”クニトコタチノカミ

地球そのもの、地球神。(地球の誕生を意味する。)

創始の地球はマグマの海であり、灼熱の星だった。

“**国御柱神**”クニミハシラノカミ(国常立神の一部)が地軸となる。 約 45 億年前(46 億年前)

帝皇日嗣七代 “**豊雲野神**”トヨクモヌノカミ

大気、雲、雨の神。

灼熱の地球に雨を降らせ、地表を固めていった。万物の根源“水”の誕生。
雨が5億年降り続き、“原始の海”が誕生した。(→生命の誕生へと) 約 40 億年前

帝皇日嗣八代 “**宇比地邇神**”ウイチニノカミ

帝皇日嗣九代 “**須比地邇神**”スイチニノカミ

最初に登場した、男女一対の神々。(皇后のはじめ)。

帝皇日嗣十代 “**角材神**”ツヌグイノカミ

帝皇日嗣十一代 “**活材神**”イクグイノカミ

生物が誕生する準備が整ったことを表す神。物体としての生物の誕生。 約 35 億年前

嫌気性細菌(酸素を必要としない生物)の発生。

原核生物(細胞内に遺伝子 DNA を格納する核をもたない単細胞生物。細菌類、藍藻類。)の発生。

※ 藍藻類の誕生によって光合成が行われ、地上に酸素がもたらされることになった。

真核生物(細胞内に核を持つ生物。)が発生し、植物と動物に分化していった。

帝皇日嗣十二代 “**大戸能地神**”オオトヂノカミ 約 15 億年前

帝皇日嗣十三代 “**大戸能辺神**”オオトノベノカミ

大地が完全に凝固したことを表す神。

巨大大陸(パンゲア大陸)の形成。生物の、海から陸上への進出。

(カンブリア紀、オルドビス紀、…白亜紀へと)

帝皇日嗣十四代 “**於母陀流神**” オモダルノカミ 約1億年前

帝皇日嗣十五代 “**阿夜訶志古泥神**” アヤカシコネノカミ

人体の完備を示す神。

神名に「流」「泥」の文字が見られることから、パンゲア大陸の分割・移動が示されている。

*内八洲外八洲観 うちやしまそとやしまかん…内八洲 = 日本、外八洲 = 世界を表し、世界の大陸を移動させ、一つに組み合わせると、日本列島の形そのものとなる事から、日本は世界のひな型であるという考え方。

帝皇日嗣十六代 “**伊邪那岐神**” イザナギノカミ 約1万2千年前(約1万6千年前)

帝皇日嗣十七代 “**伊邪那美神**” イザナミノカミ

地上に肉体を持って現れた最初の夫婦神。

造化三神の命によって、日本の国と神々を生んだ神。

《国生み》

地上がまだ油の海のような頃(大洪水の後)、造化三神は相談の上、イザナギ・イザナミに国造りを命じました。授かった天沼矛で油の海をかき回し、その雫から誕生したのが淤能碁呂島オノゴロジマ。二神は淤能碁呂島に“天の御柱”を立て、その周りを回りながら八十島(日本)を生み出していきました。

天の御柱アマノハシラ…天常立神と天底立神アマノソコチノカミが合体したもので、宇宙の軸、天の軸の事。

天の御柱は、国の御柱(地軸、国常立神と国底立神が合体したもの)とつながっている。

帝皇日嗣十八代 “**姪子神**” ヒルコノカミ

イザナギ・イザナギの初めての子。イザナミが先に声をかけてしまった事から失敗に終わり、葦船で流された。(流されて消えてしまった島。)

《大八島国》オオヤシマクニ の神々(日本の呼び名。イザナギ・イザナミが初めて生んだ8つの島)

帝皇日嗣十九代(八洲初代) “**淡道之穂之狭別嶋神**” アワジノホノサワケノシマノカミ

天占によって、イザナギの方から声をかけることで生まれた神。淡路島の事。

日本の子宮である琵琶湖をかきまぜて、ポツンと落としたのが淡路島であると言われます。

(八洲二代) **伊予之二名島** イノフタナノシマ 四国

帝皇日嗣二十代 **“愛比売神”** エヒメノカミ 伊予国(愛媛)

帝皇日嗣二十一代 **“飯依比古神”** イヨリヒコノカミ 讃岐国(香川)

帝皇日嗣二十二代 **“大宜都比売神”** オオゲツヒメノカミ 阿波国(徳島)

帝皇日嗣二十三代 **“建依別神”** タケヨリワケノカミ 土佐国(高知県)

帝皇日嗣二十四代(八洲三代) **“天之忍許呂別神”** アメノオシコロワケノカミ 隠岐国(島根県隠岐諸島)

帝皇日嗣二十五代(八洲四代) **“白日別神”** シラヒワケノカミ 筑紫国(福岡)

帝皇日嗣二十六代(八洲五代) **“豊日別神”** トヨヒワケノカミ 豊国神(大分県)

帝皇日嗣二十七代 **“建日向日豊久土比泥別神”** タケヒムカイトヨグジヒネワケノカミ 肥後神(熊本県、宮崎県)

帝皇日嗣二十八代 **“天一柱神”** アメノヒツツシラノカミ 壱岐島神(長崎県離島)

帝皇日嗣二十九代(八洲六代) **“天之狭手依比売神”** アメノサデヨリヒメノカミ(天一柱皇后) 対馬神(長崎県離島)

帝皇日嗣三十代(八洲七代) **“佐度島神”** サドノシマノカミ 佐渡島(新潟県離島)

帝皇日嗣三十一代(八洲八代) **“大倭豊秋津島神”** オオヤマトヨアキツシマノカミ 本州

(**“天御虚空豊秋津根別神”** アマツミノラトヨアキツネワケノカミ)

帝皇日嗣三十二代 **“建日方別神”** タケヒカタワケノカミ 吉備国(岡山県)

帝皇日嗣三十三代 **“大野手比売神”** オオヌテヒメノカミ 小豆島(香川県離島)

帝皇日嗣三十四代 **“大多麻流別神”** オオタマルワケノカミ 大島(屋代島、山口県離島)

帝皇日嗣三十五代 **“天一根神”** アメノヒツツネノカミ 姫島(大分県離島)

帝皇日嗣三十六代 **“天之忍男神”** アメノオシノカミ 知訶島ちかのしま(五島列島、長崎県離島)

帝皇日嗣三十七代 **“天両屋神”** アメノフタヤノカミ 二子島(男女群島、長崎県離島)

(自身は、北海道と沖縄はどこに…?となってしまったのですが、

両者が正式に日本の領土と認められたのは明治になってから、とネットにあり、なるほどでした。^^)

《神生み》

帝皇日嗣三十八代 **“大事忍男命”** オオコトオシノカミ

イザナギ・イザナミの神生みによって最初に生まれた神。(神生みの大事がこれから始まることを表した名前等諸説あり。)

<家宅六神 = 建物の材料や構造を示したもの、家屋を守護する6柱の神>

“石土毘古神” イハツチビコノカミ、**“石巢比売神”** イシヒメノカミ、**“大戸日別神”** オホトヒワケノカミ、

“天之吹男神” アメノフキオノカミ、**“大屋毘古神”** オオヤビコノカミ、**“風木津別之忍男神”** カザモツワケノオシノカミ、

<海を統べる神> **“大綿津見神”** オオワタツミノカミ

<河口を統べる神> **“速秋津比古神”** ハヤアキツヒコノカミ、**“速秋津比女神”** ハヤアキツヒメノカミ(祓戸大神の二柱)

○速秋津日子神と速秋津比女神から生まれた神○

“沫那芸神”アワナギノカミ、“沫那美神”アワナミノカミ、“頼那芸神”ツラナギノカミ、“頼那美神”ツラナミノカミ、

“天水分神”アメミクマリノカミ、“国水分神”クニミクマリノカミ、

“天之久比奢母智神”アマノクヒザモチノカミ、“国之久比奢母智神”クニノクヒザモチノカミ

<風の神> “志那都比古神”シナツヒコノカミ <木の神> “久久能智神”ククノチノカミ

<山の神> “大山津見神”オオヤマツミノカミ <野の神> “鹿屋野比売神”カヤノヒメノカミ(“野椎神”ノヅチノカミ)

○大山津見神と鹿屋野比売神から生まれた神○

“天之狭土神”アメノサツチノカミ、“国之狭土神”クニノサツチノカミ、“天之狭霧神”アメノサギリノカミ、

“国之狭霧神”クニノサギリノカミ、“天之闇戸神”アメノクラドノカミ、“国之闇戸神”クニノクラドノカミ、

“大戸惑子神”オホトマヒコノカミ、“大戸惑姫神”オホトマヒメノカミ

<神が乗る船の神> “鳥之石楠船神”トリノイワクスフネノカミ(“天鳥船神”アメトリフネノカミ)

<食物の女神> “大宜都比売神”オホゲツヒメノカミ

? <記紀には登場しない“祓戸大神”> ?

“瀬織津比売神”セオリツヒメノカミ、“気吹戸主神”イブキドヌシノカミ、“速佐須良比売神”ハヤサスラヒメノカミ

帝皇日嗣六十九代(?) “火之加迦具土神”ホノカグツチノカミ(“火之夜藝速男神”ホノヤギハヤヲノカミ)

火の神である火之加迦具土神を生んだイザナミは、ひどい火傷を負ってしまったことから、イザナギは嘆き悲しみ、十拳剣“天之尾羽張” (“天之尾羽張神”アメノオノハハリノカミ)を使って、

火之加迦具土神の首を切り落としたとされ、その時に生まれた神々が

“石折神”イハサクノカミ、“根折神”ネサクノカミ、“石筒之男神”イハツツノカミ

“甕速日神”ミカハヤヒノカミ、“樋速日神”ヒハヤヒノカミ、“建御雷之男神”タケミカツチノカミ、

“闇淤加美神”クラオカミノカミ、“闇御津羽神”クラミツハノカミ、

“正鹿山津見神”マサカヤマツミノカミ、“淤滕山津見神”オドヤマツミノカミ、“奥山津見神”オクヤマツミノカミ、

“闇山津見神”クラヤマツミノカミ、“志藝山津見神”シギヤマツミノカミ、“羽山津見神”ハヤマツミノカミ、

“原山津見神”ハラヤマツミノカミ、“戸山津見神”トヤマツミノカミ

<火傷をおってしまったイザナミから生まれた神>

“金山毘古神”カナヤマビコノカミ、“金山毘売神”カナヤマビメノカミ、

“波邇夜須毘古神”ハニヤスビコノカミ、“波邇夜須毘売神”ハニヤスビメノカミ、“彌都波能売神”ミツハノメノカミ、

“和久産巢日神”ワクムスヒノカミ (子供が“豊宇氣毘売神”トヨウケビメノカミ)

<イザナミを慕い泣く、イザナギの涙から生まれた神>

“泣沢女神”ナキサワメノカミ

伊邪那美神の亡骸は、伊邪那岐神によって、出雲の国(島根県)と伯耆ほうぎの国(鳥取県)の境、比婆之山に祀られたとありますが、ウィキペディアによると、伊邪那美神の墓は日本各地にあるとされ、

“伊邪那美神”は役職名であり、たった一人(一柱)ではないことがわかります。

また正統竹内文書によると、「伊邪那岐神が火之加迦具土命の首を斬った」とあるのは、

火之加迦具土命の“荒魂”(荒ぶる側面)を斬ったという事で、

火之加迦具土命は火の神、刀の神として“須佐之男命”スサノオノミコトに降りたとの事です。^^

須佐之男命の勇者伝説、八岐大蛇退治が浮かびます。

火之加迦具土命を斬った時に生まれたとされる“石筒之男神”イワツツノオノカミは、

名刀“正宗”まさむねとされ、剣には靈力が宿ると言われることがわかります。

《黄泉の国のイザナミ》

イザナギはイザナミを忘れることが出来ず、黄泉の国へ迎えに行く場面が描かれています。

黄泉国よもつくに(黄泉の国)は、真っ暗な世界を表す夜見之国よみのくににや、

地下に存在する国を表す根堅洲国ねのかたすくに(根国ねのくに)等と表現される、死者の国です。

そこでイザナギは、「決して見ないように」と言ったイザナミの言葉に反して、醜く腐敗したイザナミの

姿を見てしまい、恐ろしさのあまり逃げ出し、黄泉国の醜女しこめに追われる事となります。

あの世とこの世の境目にあるとされる“黄泉比良坂”よもつひらさかまで、必死に逃げ帰ってくると、

そこに生っていた桃の実を見つけ、投げつける事で、醜女たちを追い払うことができました。

その桃の実にイザナギが与えた名前が“意富加牟豆美命”オカムズミノミコトで、

桃の実には、神(高皇産靈神?)が降ろした靈力が宿っていた為とされます。^^

醜女たちが退散したあと、今度はイザナミ自身が現われ、黄泉比良坂に置かれた大岩を挟んで、

イザナミが、「一日に千人を殺す」と言い、

イザナギは、「ならば、一日に千五百人を生むことにしよう」と言ったとされます。

とてもショッキングな場面でもありますが、ニュートラルに考えると、

全ての人に平等に訪れる、“生(陽)と死(陰)”を肯定し、

常に生が死を上回る事 = 希望の未来がある事を象徴している、とも言えないでしょうか? ^^

見るなど言われると、よけいに見たくなる…、そしてとんでもないことになる(笑)

それが生きている、ということなのかもしれません。^^

“黄泉比良坂”と言えば、“菊理姫”が神話(『日本書紀』)に登場する、唯一の場面でもあり、

イザナギは、菊理姫の言った事を褒め、その場を去ったとされます。

菊理姫が何を言ったのかは誰もわからない…、自分で想像し、創造していく場が、

神話でもあるのではないのでしょうか？

菊理姫は“根源天照皇太神”の分身であり、後に誕生する“天照大神”の

ハイアーセルフとも言える、高次の存在です。

イザナギの前に子供の姿で現れ、「未来に、お二人の子供である私が待っていますよ！^^」

と伝えたとしたら、イザナギが褒めた、とあるのもシクります。

その時イザナギには、イザナミと共に創ろうとしていた素晴らしい未来が見えたのではないのでしょうか？

自身は今、作り話をしているのではなく、自己の真実を語り、その世界に生きています。

神話は、神の子である私達の物語でもあります。^^

イザナギ・イザナミとは誰か？特定の二柱の神ではなく、男性性・女性性を象徴する称号であり、

天照大神を祖神とする、現代の天皇皇后両陛下の御姿でもあります。

皇室の歴史のはじまりは、神武天皇でも天照大御神でもなく、宇宙のはじまり、根源にあります。

伊邪那美神・伊邪那美神が地上に肉体を持ったのは、約1万6千年前(口伝では1万2千年前)とされ、

縄文の初代であり、紀元前5世紀頃の弥生時代が最後だったとあります。

自身は何故か、“あわうた”を歌いながら練り歩く、イザナギ・イザナミ神の姿がイメージされる事があり、

いつの頃のお二人なのかはわかりませんが、世の平安、生きとし生けるもの全ての幸せ願う、

深い愛の御心を感じます。^^

《イザナギ神の禊から生まれた神々》

イザナミは黄泉の国からこの世に戻り、筑紫の日向の橘の小戸の阿波岐原で

黄泉の国の穢れを落とすために、禊払いをしたと言われ、そこでもたくさんの神々が誕生しました。

○イザナギが脱ぎ捨てた衣服から生まれた神々○

“**衝立船戸神**”つきたつふなどのかみ、“**道之長乳齒神**”ミチノナガチハノカミ、“**時量師神**”トキハカンノカミ、

“**和豆良比能宇斯能神**”ワズラヒノウシノカミ、“**道保神**”チマタノカミ、“**飽咋之宇斯能神**”アキグヒノウシノカミ

“**奥疎神**”オキザカルノカミ、“**奥津那芸佐毘古神**”オキツナギサビコノカミ、“**奥津甲斐弁羅神**”オキツカイベラノカミ、

“**辺疎神**”ヘザカルノカミ、“**辺津那芸佐毘古神**”ヘツナギサビコノカミ、“**辺津甲斐弁羅神**”ヘツカイベラノカミ

○イザナギが川で禊をした時に生まれた神々○

“**八十禍津日神**”ヤソマガツヒノカミ、“**大禍津日神**”オオマガツヒノカミ

“**神直毘神**”カムナオビノカミ、“**大直毘神**”オオナオビノカミ、“**伊豆能売**”イズノメ

“**底津綿津見神**”ソコツワタツミノカミ、“**底箇之男神**”ソコツツノオノカミ

“**中津綿津見神**”ナカツワタツミノカミ、“**中箇之男神**”ナカツツノオノカミ

“**上津綿津見神**”ウハツワタツミノカミ、“**上箇之男神**”ウハツツノオノカミ

禊の最後に生まれたのが、“**三貴子**”(三貴神)です。^^

帝皇日嗣百三十二代 “**天照大御神**”アマテラスオホミカミ イザナギの左目からうまれた神

帝皇日嗣百三十三代 “**月読命**”ツクヨミノミコト 右目から生まれた神

帝皇日嗣百三十四代 “**建速須佐之男命**”タケハヤスサノヲノミコト 鼻からうまれた神

伊邪那岐神は、「最後に三柱の貴い子を得た！」と喜び、

天照大御神には首飾りの玉の緒を渡して“高天原”を、月読命には“夜の食国”をすくにを、

建速須佐之男命には“海原”を、委任したと言われます。

帝皇日嗣百三十五代 “**御倉板拳之神**”ミクラタナノカミ

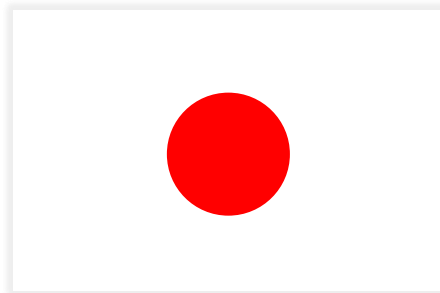
伊邪那岐神が天照大御神に授けた首飾りの珠のことで、こちらも立派な一柱の神です。^^

そして、年表には、

“**天忍穗耳尊**”、“**瓊瓊杵尊**”、“**彦穗々出見尊**”、“**鵜草葺不合尊**”(前 50 年)、

“**五瀬尊**”、“**神武天皇**”即位(57 年)

と続いていて、どうとう、“**人皇**”初代=“**神武天皇**”へとたどり着きました\(^o^)/！！

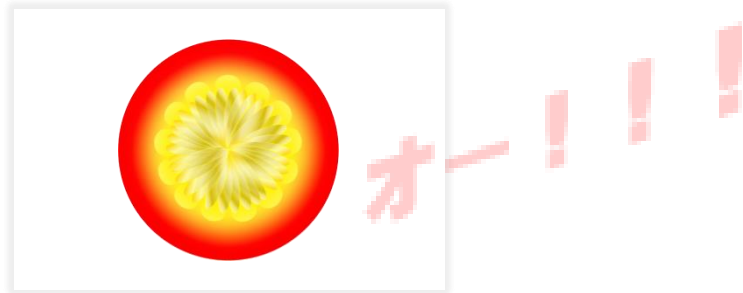


究極の白(≡究極の神聖)の中の、**究極の赤(=究極の愛)**を表す、“**日の丸**”が現れました！^^

神話には、これまで一度も聞いた事がなかったような神々が、続々と登場しますが、
一柱、一柱に、そこから広がっている、膨大な世界があることがわかり、
そのどこかに生きているのが、今の私達なのだと思います。

裾野にいる私達一人一人が、一なる“根源”を目指し、登って行くことで、
人の中に生き続けている全ての神々もまた、一なる源へと帰っていくことが出来る——

新しい神話は、地上の私達からはじまっています！！^{^^} オー!!!



正統竹内文書では、アマテラス、ツキヨミ、スサノオというのは、三人の子供ではなく
“三つの氏族”の事であると言われます。

アマテラス＝“太陽の神官”、ツキヨミ＝“月の神官”、スサノオ＝“海原の神官”

であり、その三つの氏族を統轄したのが、イザナギであると。(男性から子供が生まれた訳?!ですね。^^)

日(太陽)・月・地(地球)の三位一体力を表すものであり、それを継ぐものが日嗣(日月地)でもあります。

世界の“雛形”として“日本の国”を創ったのは、イザナギ・イザナミ神でした。
皇室の紋章となっている“十六弁菊花紋”(真には太陽紋)は、日本の氏族が十六方向＝世界へと
散らばっていった姿の象徴で、同じ紋章が世界中で見られることは、よく知られています。
正統竹内家の紋章である“四つ割菊に葉付菊”は、それらの氏族が再び日本へと帰ってくる事を
示したものとされ、それが、アマテラスとスサノオ(、ツキヨミ)の氏族であり、
“大和族”と“出雲族”につながっています。(ツキヨミは、その子孫達が日本へ帰ってきたとの事です。)

《アマテラスとスサノオの誓約(ちかひ)》

古事記では、黄泉の国のイザナミに会いたいと泣いてばかりいて、海原を治めようとしないスサノオは、
イザナギに追放されてしまいます。

スサノオは黄泉の国に行く前に、姉のアマテラスを訪ねる事にしたのですが、
高天原を奪いにきた?!と勘違いしたアマテラスは、戦闘態勢を整え、待ち構えていました。

そこで身の潔白を証明するために行われたのが宇氣比うけひ（誓約、古代日本で行われた占い）でした。

まずアマテラスが、スサノオの持っている十拳剣とつかのつぎを受け取って、噛み砕き、吹き出した息の霧から誕生したのが、三柱の女神（宗像三女神）です。

“多紀理毘売命”タキリヒメ、“市寸島比売命”イチキシマヒメ、“多岐都比売命”タキツヒメ

次にスサノオが、アマテラスの八尺の勾玉のみすまるの珠を受け取って、噛み砕き、吹き出した息の霧から誕生したのが、五柱の男神です。

“天之忍穂耳命”アメノオシホミミ、“天穂日命”アメノホヒ、“天津彦根命”アマツヒコネ、

“活津日子根命”イクツヒコネ、“熊野久須毘命”クマノクスビ

スサノオは自身の剣から生まれた神が、女神であったことから、自分の心が清らかである事が証明されたとし、勝利宣言をしたとあります。

（正統竹内文献では、天照大御神の珠から生まれた5柱の男神が、天皇の系図の重要な部分となっている…との驚きの内容がありましたが、また後の考察にしたいと思います。^^）

天皇の系図は、誓約うけひで誕生した“天之忍穂耳命”から“神武天皇”へと続いていきます。

“天照大御神”アマテラスオオミカミ

“正勝吾勝勝速日天之忍穂耳命”マサカツアカツカチハヤヒアメノオシホミミノミコト

“天通岐志国通岐志天津日高日子番能通通芸命”アメニギシクニニギシアマツヒコヒコホノニニギノミコト

“火遠理命”（山幸彦、彦火火出見尊ヒコホホデミ）ホオリノミコト

“天津日高日子波限建鵜草葺不合命”アマツヒコヒコナギサタケウガヤフキアエズノミコト

“神武天皇”（狭野命サノ、彦火火出見尊ヒコホホデミ）ジンムテンノウ

日本では古来から、政治を司る“統治王”と、祭祀を司る“祭祀王”が、常に一体となって世を治めてきたとされ、アマテラスは祭祀王、スサノオは統治王です。祭祀王は、天照大御神を降ろすことのできる地上のポータルであり、位としては統治王の上とされ、男女どちらがなる場合もありますが、これまでの歴史では、女性が祭祀王となった時代の方が、世がうまく治まるとされ、それが当然と思うのは私だけでしょうか？^^

『帝皇日嗣』の神々=『古事記』の神々 のトップに

全ての母なる（究極の母性性）“根源天照皇太神”と記し、神柱は完成です！^^

下つ鬻根いねに宮柱みやはしら太敷ふとし立て—— 令和の神話の、はじまりはじまり～～！！

2024.5.5 瀧本流美

NMC の中心軸
地球と根源太陽をつなぐ
根源の愛の太柱

皇道(神道)
グレート・セントラルサン・ネットワーク

NMC の核心
皇(神)人

いま、日本の本の一なる根源が動きだしています。日の本の一なる根源は、天照皇太神 根源太陽です。土にあるがごとく下にも内にあるがごとく外にも。』古来より、日の本のすべての光のネットワークは、根源太陽をあらわす天照皇太神を中心としたレイラインであり、そのネットワークです。そのレイラインとエネルギーネットワークが、今、本格的に始動し始めました！それは日本の本の大八洲のすべてに張り巡らされています。

そしてその唯一最大の宗(門)となるのは、神と人とが一体となった神人の、一人一人の『御魂』です。それらが一体となり、共鳴しあい響くさまは、八十鈴が鳴るようであるといえるでしょう！一なる至高の根源である皇神、皇御親の中心から流入する、その根源の光とエネルギー。それと共鳴する大八洲すべてのレイラインと御魂。それらが真に発動する時、日の本のすべてのレイラインが発動します！それらは黄金に輝き、そして根源のフオトンを生み出します。その時、日本といふ黄金龍(流)体は、地球を導く天鳥船となるでしょう！

いま、日の本の一なる根源が動きだしています。日の本の一なる根源は、天照皇太神 根源太陽です。土にあるがごとく下にも内にあるがごとく外にも。』古来より、日の本のすべての光のネットワークは、根源太陽をあらわす天照皇太神を中心としたレイラインであり、そのネットワークです。そのレイラインとエネルギーネットワークが、今、本格的に始動し始めました！それは日本の本の大八洲のすべてに張り巡らされています。



根源天照皇太神

ミオヤモトスミクライマシ

奇理姫

アメノミナカヌシ	造化三神 ぞうかさんしん
タカミムスビ	
カミムスビ	
ウマシアシカビヒコチ	別天津神 ことあまつがみ
アメノトコタチ	

クニノトコタチ	神世七代 かみやななよ	
トヨクモノ		
ウヒチニ		スヒチニ
ツノグヒ		イクグヒ
オホトノジ		オホトノベ
オモダル		アヤカシコネ
イザナキ		イザナミ

“三貴神”
天照大御神(天照神)
月読命(月神)
須佐之男命(海原神)

天孫降臨・日本国126代天皇即位

天照大御神
天忍穂耳尊
瓊瓊杵尊
火折尊(彦火火出見尊)
鸕鷀草葺不合尊
神武天皇(彦火火出見、狹野、神日本磐余彦天皇)
人皇1代
人皇2代 綏靖天皇
(人皇3代~125代 略)
人皇126代 徳仁天皇

皇人 流美

道は、
愛にはじまり
愛におわる

スピリチュアル・ハイラーキー
(宇宙聖白色同朋団)

新GWBH

上にあるが如く下にも

内にあるが如く外にも

アトランティスのアセンディッド・マスター
ヘルメス・トリスメギストス

八十鈴 鳴る
大八洲 八十鈴 鳴りなりて
龍と鳳凰 ひとつなる

根源神界 天照皇太神 黄金龍神

